

## 第1章 「<sup>たんざんそすい</sup>淡山疏水」とは

<sup>そすい</sup>疏水（「疎水」とも表記されます。）とは、河川などを水源として<sup>かんがい</sup>かんがい<sup>\*1</sup>、給水、舟運、発電のために、あるいは排水のために、新たに土地を切り開いて通水させること及びその人工水路をいいます。

水に恵まれず、<sup>かんがい</sup>かんがいに苦勞していた<sup>いなみ野</sup>いなみ野<sup>\*2</sup>台地の村々では、江戸時代明和年間（1764年～1772年）に先人が<sup>やまだがわそすい</sup>山田川疏水の着想を得ましたが着工に至りませんでした。これに続く人たちが大変な苦勞を重ね、明治時代（1868年～1912年）に<sup>おうごがわそすい</sup>淡河川疏水を開削し、大正時代（1912年～1926年）に<sup>やまだがわそすい</sup>山田川疏水を開削しました。<sup>おうごがわそすい</sup>淡河川疏水は<sup>かこがわ</sup>加古川水系の<sup>おうごがわ</sup>淡河川から取水しています。<sup>やまだがわそすい</sup>山田川疏水は<sup>しじみがわ</sup>同水系の<sup>しじみがわ</sup>志染川上流部（別名「<sup>やまだがわそすい</sup>山田川」）<sup>\*3</sup>から取水していましたが、<sup>とうばんようすい</sup>東播用水が完成してからは、<sup>おおかわせ</sup>大川瀬導水路から用水を受けるようになりました。

これら二つの疏水は一つのものとして「<sup>おうごがわやまだがわそすい</sup>淡河川山田川疏水」と名付けられ、今日、この<sup>そすい</sup>疏水を受け継ぐ人々は親しみを込めて「<sup>たんざんそすい</sup>淡山疏水」と称しています。また<sup>たんざんそすい</sup>淡山疏水の水が潤す地域を「<sup>たんざん</sup>淡山地域」、<sup>たんざんそすい</sup>淡山疏水を管理する兵庫県<sup>たんざん</sup>淡河川山田川<sup>たんざん</sup>土地改良区<sup>\*4</sup>を「<sup>たんざん</sup>淡山土地改良区」と称しています。

本誌においてもこれに倣い、<sup>たんざんそすい</sup>淡山疏水、<sup>たんざん</sup>淡山地域、<sup>たんざん</sup>淡山土地改良区を用います。



<sup>おうごがわそすい</sup>当初の淡河川疏水幹線水路



<sup>とうしゅこう</sup>当初の山田頭首工<sup>\*5</sup>

<sup>かんがい</sup>かんがい<sup>\*1</sup>：農地に人工的に水を供給することです。

<sup>いなみ野</sup>いなみ野<sup>\*2</sup>：<sup>いなみの</sup>印南野台地及びその周辺は古くは伊奈美などとも表記されていましたが、現在この地域の多くの人々が「<sup>いなみ野</sup>いなみ野」と表記しています。

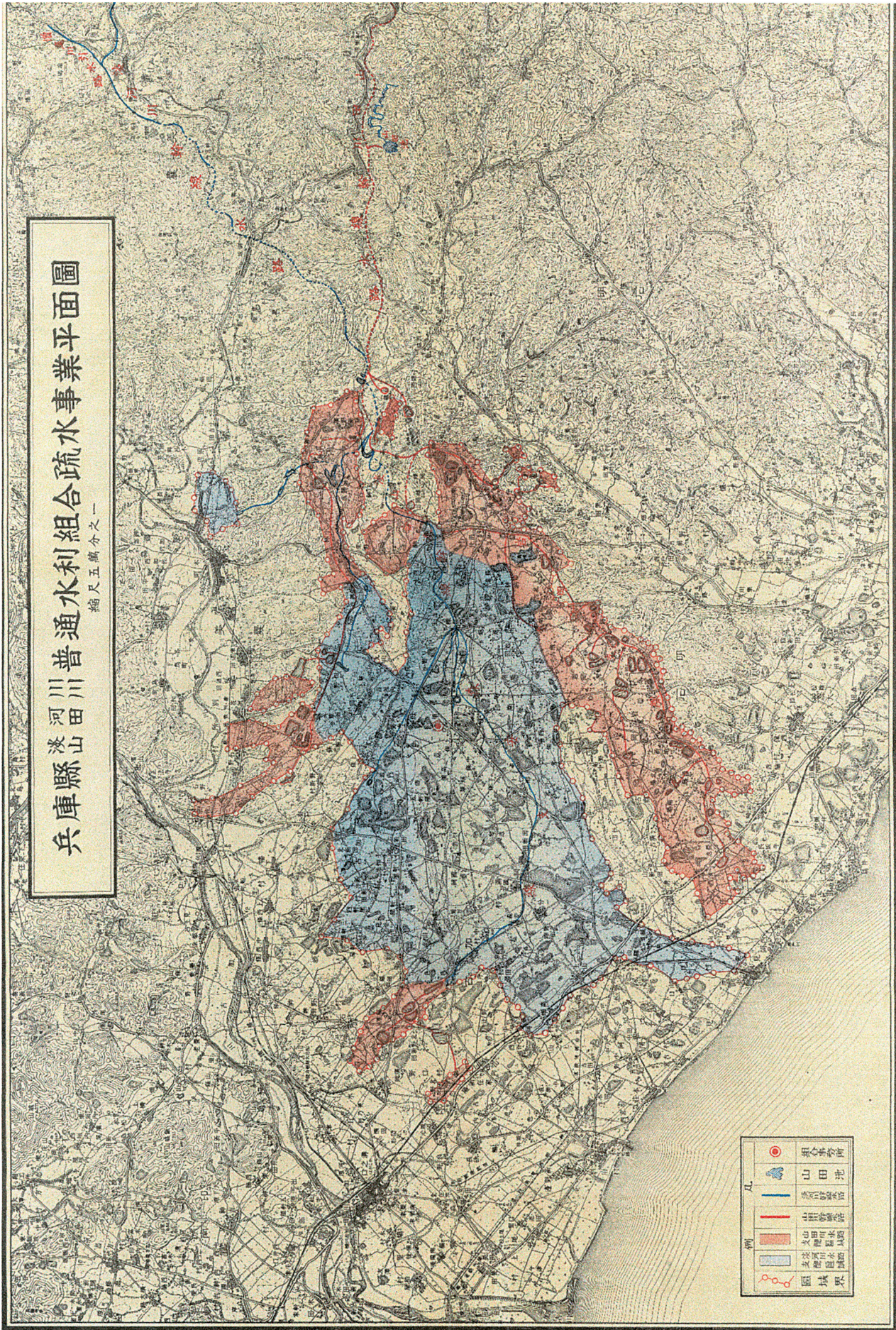
別名「<sup>やまだがわそすい</sup>山田川」<sup>\*3</sup>：<sup>しじみがわ</sup>志染川上流の<sup>みのたがわ</sup>箕谷川合流地点（神戸市北区山田町下谷上）から<sup>やまだちようしもたにかみ</sup>淡河川合流地点（三木市志染町<sup>おうごがわ</sup>御坂）までの区間は、かつて山田川と呼ばれていました。

<sup>たんざんそすい</sup>土地改良区<sup>\*4</sup>：農地、ダム、水路、農道などの整備と維持管理などを行うために、関係農地の耕作者等が知事の認可を得て設立する団体です。

<sup>とうしゅこう</sup>頭首工<sup>\*5</sup>：河川などから用水を水路に引き入れる施設です。主に取水堰と取水口で構成されており、用水路の「頭首」にあたる工作物であることからこの名称が用いられています。

# 兵庫縣淡河川普通水利組合疏水事業平面圖

縮尺五萬分之二



○	河口
■	山田池
—	灌溉用水管
—	排水溝
■	山田池
■	山田池
■	山田池
○	山田池